

# CIEC Newsletter

## CONTENTS

- ・98PCカンファレンス 1
- ・学生院生メーリングリスト開設
- ・CIEC 会員状況
- < ニュース・トピックス >
- ・大学の情報教育の課題とCIEC ,  
大学生協に期待されること 2
- ・韓国国際シンポジウム報告 4
- ・中国語を巡るインタビュー 8
- < 会員コラム >
- ・生協職員会員紹介 8
- < ML 討論 > 10
- ・メーリングリスト ciec から 10
- ・メーリングリスト  
ciecnet から 11
- < CIEC 活動報告 >
- ・活動日誌 14
- ・第1、2回 運営委員会報告 15
- ・国際委員会報告 16

## CIEC 会員状況

団体会員 69団体		
企業	22	31.9%
生協	47	68.1
個人会員 603名		
教員	363	60.2%
大学職員	27	4.5
大学院生	23	3.8
大学生	10	1.7
企業	26	4.3
研究員	5	0.8
その他	1	0.2
生協職員	148	24.5

## ご報告

### 決定！ 98 PC カンファレンス

98 PCカンファレンスの開催校と日時が以下のように決まりましたので、お知らせ致します。今から、ぜひ、レポート報告などのために予定を空けておいて下さいますようお願い致します。

開催校：日本福祉大学半田キャンパス

JR名古屋駅から名鉄で30分

知多半田駅下車

日時：7月28日～31日の内、3日間

### 学生院生のメーリングリストにご参加を！

学生院生ばかりでなく教職員も自由にご参加できます。学内のコンピュータ環境、コンピュータの授業、コンピュータの購入、サポート等、その他いろいろコンピュータに関する問題について投稿して下さい。

このメーリングリストstudents@ciec.or.jpサーバへの参加登録は、サブジェクト未記入で本文に #subscribe #end というコマンドをstudents-ctl@ciec.or.jp宛に送って下さい。(注意：students@ciec.or.jpに送ると投稿になってしまいます。)また、下記にメールでご連絡頂ければ事務局で登録設定を致します。(P.11 参照)

### 今年度第1回 CIEC 研究会は3月28日(土)

98.1.13現在 開催予定 講師は三宅なほみ氏

CIECニューズレター

1998年1月30日発行

発行：CIEC(コンピュータ利用教育協議会)

編集：CIEC運営委員会

〒166東京都杉並区和田3-30-22大学生協協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196

e-mail:ciec-jim@ciec.or.jp URL:http://www.ciec.or.jp/

大学関係者の多いCIECにあって、いまだ、大学における情報教育に正面から取り組んでいるとは言い難いと思います。6号では、綾 皓二郎会員に大学における情報教育の現状と課題を整理し、CIECとしてのこの問題への取り組みの方向性を問題提起して頂きました。これを契機に、会員相互意見交換から CIECとしての具体的活動まで、議論が巻き起こりますよう期待致します。

# 大学の情報教育の課題と CIEC , 大学生協に 期待されること

綾 皓二郎会員  
石巻専修大学理工学部

大学における情報教育が大きな転換点を迎えている。まず外的要因が情報教育にもたらす課題、次に CIEC , 大学生協に期待されることを考えてみたい。

## 1. コンピュータ/ネットワーク技術の急速な進歩がもたらす課題

コンピュータは、今までは計算機械と考えられてきたが、技術の進歩によりその計算機能は隠蔽され、人間の知的活動全般を強力に支援する機械/メディアに進化変身した。これからは、理系・文系を問わず学生として、職業を問わず市民として、高度情報社会・ネットワーク社会を生きてゆくために必要な情報教育を考える必要がある。ユーザーとしてみたとき、教員、学生には次のような問題がある。

1) 教員ユーザーの問題：個々の教員が技術の進歩に追いついていくことが次第に難しくなっている。担当教員の高齢化が進むなかで、教員の研修をいかに実施していくか。コンピュータ利用教育の実践が特定企業の商品に支配されるなかで、

教育の主体性をどのように保っていくか。

2) 学生ユーザーの問題：TVゲーム、携帯電話などで得ているマルチメディアのセンスを学習や研究におけるコンピュータ/ネットワークの利用にいかにかけるか。

## 2. 中教審答申に基づく初等中等教育における情報教育の推進にあたっての課題

次の学習指導要領の改訂まで、つまり、21世紀初頭までの間、わが国の大学は、学生にはコンピュータ、情報に関する知識がほとんどないという前提のもとで、コンピュータリテラシー教育を続けざるを得ない。はたしてこれでよいのかという危惧を初めに抱く。それはともかく、将来の情報教育では次のようなことを検討する必要がある。

1) 初等中等教育と高等教育での役割分担を明確にし、大学と高校の情報教育の円滑な接続を目指すべきである。学生は大学入学前に、少なくともタッチタイピング、パソコンの基本的操作、日本語ワープロの使い方を習得しておくことが望ましい。大学の情報教育では学生の知的水準に見合った、コンピュータ/ネットワークを道具として使う、表現能力やコミュニケーション能力、共同作業能力を育てる教育、さらには情報倫理教育を行うことが基本となると思われる。

2) 情報教育は、現行の「英語教育」の欠陥や「自動車運転教育」に学ぶことが多いのではないか。選別の道具ではなく、交流の道具、楽しい道具としての“使える情報教育”が必要である。教育目的・達成度が明確で、効率的なカリキュラムが望まれる。

3) 学習指導要領と教科書検定制度の厳しく硬直した規制を緩和しなければならない

この規制緩和がなければ、初等中等教育で技術の進歩に対応した柔軟な情報教育は不可能で、大学の情報教育とのシームレスな接続は難しい。

### 3. 高等教育の大衆化と少子化の進行がもたらす課題

21世紀初頭には18歳人口は激減し、しかも進学率が50%近くになり、進学希望者数と大学の定員はほぼ等しくなる。これにより新入生の学力の低化と多様化は一段と進み、多くの大学できわめて深刻な問題となることが予想されている。知的活動支援機械としてのコンピュータは各自の知的水準に見合った使い方しかできないので、コンピュータ/ネットワークを道具として使う場合に本当に必要なことは、コンピュータ利用以前の、日本語や英語、数学などの基礎学力や、芸術や哲学などの一般教養 - liberal arts and sciences - である。このことを改めて学生も教員も認識すべきである。これからの大学の情報教育は、特定の教員が一般教育の特定の限定された科目で教えるものではなく、一般教育から専門教育までの大学教育全般のなかで幅広く担われるものであることを全教員に周知させる必要がある。

### 4. 「わかち持たれた知能と学習者共同体の形成」について

現在の市場主義の社会ではマイノリテ (minority) は、自ら共同体を形成し知恵を出し合って情報を共有して生きて行かざるを得ない。彼らの活動にはコンピュータ/ネットワークの利用が必須となってきている。例えば、障害者はコンピュータ/ネットワークを道具として使う意識はきわめて明確であり、コンピュータ/ネットワークが障害者の人間としての可能性を拓げる道具となっていることを強く認識している。また、マスコミに無視されることの多い市民運動においてもコンピュータ/ネットワークの利用による共同体の形成と情報発信は欠かせないものとなっている。福祉の領域にとどまらず、広く NGO/NPO 活動では、「わかち持たれた知能と学習者共同体の形成」は、乏しい予算の制約の下で、ごく自然に行われているのではないか。国外に目を向けなくとも国内に、大

学の情報教育に携わる者が学ぶべきことは多い。学校教育的視点からだけでなく、時にはこのような障害者や市民運動の立場からコンピュータ/ネットワークの利用を考えると、今年のシンポジウムのテーマを具体的に掘り下げていけると思われる。

### 5. CEIC, 大学生協の課題

CEIC, 大学生協は NGO/NPO であろう。そうだとすれば、CEICや大学生協は、上記のさまざまな課題を解決するために、行政や営利企業とは異なる、NGO/NPO ならではの情報活動が期待されていると考える。そのためには、例えば

- 1) CIEC においては、小中高の教員や職員の会員を増やし、小中高の情報教育組織との協力を強め、情報教育における連携を具体化する必要がある。
- 2) 大学生協は、地域生協など市民生協と連携し、これまでに蓄積した経験と知恵を差し延べて、市民の立場でコンピュータ/ネットワークの利用を推進して行く必要がある。このような動きがすでに西日本の生協で進んでいるので、全国展開を図ることがこれからの課題かと思われる。

#### 参考文献とホームページ

- 1) 綾 皓二郎「高校普通科の情報教育」CIEC ML 649, 1997
- 2) 綾 皓二郎・藤井 亀  
「「中教審」答申を受けて「情報リテラシ - 教育」を考える」  
'97 PC Conference 予稿集, pp151-154, 1997
- 3) 綾 皓二郎・藤井 亀  
『コンピュータとは何だろうか』森北出版, 1997
- 4) 綾 皓二郎・藤井 亀  
「大学におけるコンピュータリテラシ教育の在り方に関する一考察 - 知的活動全般を支援する視点から、ネットワーク市民の視点から」  
HAS ニュース No.15, pp133-161, 1996
- 5) 綾 皓二郎・藤井 亀「理工学部における一般情報教育の問題点とカリキュラム現代化のための幾つかの指針」石巻専修大学研究紀要第7号,



- (2) インターネット接続のためのインフラ整備
- (3) 教員の情報教育 (現在は少数の教師のボランティア的サービスに頼っている)
- (4) 古くなった機種の入替
- (5) 小学校用テキストの開発 (情報教育は教科として位置付けられていないため指定教科書はない)
- (6) 中学校のカリキュラム内での情報教育の位置付け (中学校での情報教育は職業家庭科に組み込まれているが、その占める割合はほんのわずかでしかも時代後れのものである)

2. 高等学校での問題点としては次のことが指摘された。

- (1) 教科としての情報教育が行われているのは商業、工業、農業、看護等実技系の高校のみである。
- (2) 中学校卒業生の大部分は普通高校に進学し、情報教育が行われている実技系を選ぶのはごくわずかである。
- (3) 普通高校には教科としての情報教育はなく、数学の時間にBASICプログラミングに少々ふれる程度である。
- (4) インフォメーションテクノロジーは大学入試科目に入っていないのでとくなくおざりにされているのが実情である。

3. 大学ではインフォメーションテクノロジーの時代に合わせて設備の充実や学部の新設、改組が行われているが、次のような問題が残されている。

- (1) 文系の学生のための情報教育カリキュラムの検討が十分にされていない。
- (2) 小学校、中学校でわずかでも続いてきた情報教育が入試対策一色となる高校の3年間では空白になってしまうため、大学では新たに基礎段階の教育から始めなければならない。

以上のような状況を改善するための方法として評価されている「100校プロジェクト

(1994-1997)が紹介された。

\*小学校から高校まで(特殊教育学校を含む)の選ばれた111校が財政面だけでなく、技術面でのサポートを受けつつコンピューター教育に取り組み、1995年から実験授業が続けられている。この波及効果が選ばれた実験校外にも及んでいく

ことが期待される。

情報処理学会とはちがって、小・中・高の教員、大学教員、なかでも専門外の文系出身者を多くメンバーにもつCIECの活動も紹介された。コンピューター利用を一般に広げていく仲介役としてのCIECのユニークな活動がシンポジウム出席者に理解されたと思う。

\*97カンファレンスの分科会で「100校プロジェクト」参加校、大津市立平野小学校の石原一彦先生が平野小学校の情報教育について初期のころの苦労も含めて素晴らしい発表をなさいました。

## 呉伝嘉国立台湾科技大学教授の報告

台湾は短期間でコンピューターのホスト、スキャナー、モニター、マウス等では世界有数の生産国に成長した。「帰国学人」と呼ばれるアメリカを主とする海外の大学院で学位を取得して帰国した人々(呉教授もそのひとり)の活躍に負うところが大きい。また国の政策として情報系の大学や専門学校をつくって人材を送り出す努力も続けている。

1997年6月から実施されている教育部の情報教育改革計画は小学校から大学まで全レベルの学校を含む画期的なものである。

### 1. 小・中・高・専門学校の情報教育のターゲット

- (1) 小学校 - コンピューターに興味をもたせ、生活とコンピューターのかかわりを理解させ、コンピューターの基本操作を学ばせる
- (2) 中学校 - コンピューター活用能力を高め、コンピューター利用によって入手可能となる情報に正しく接する態度を養う
- (3) 高等学校 - コンピューターサイエンスの理論を学び、コンピュータによるプロブレムソルヴィングの能力を高める
- (4) 専門学校 - コンピューター関連のスペシャリストとなる技術を習得させる

上記の目標を達成するための新カリキュラム

学校の種類	公表時期	履行時期	履行のレベル	実施カリキュラム
小学校	93年9月	96年8月	3～6	グループ活動
中学校	94年1月	98年8月	2～3	必修コース
高等学校	95年1月	98年8月	2か3	選択コース
専門学校	86年2月	88年8月	1	必修コース

教育部は教師のコンピューター活用能力を高めるための研修を20の大学に委託している。実施状況は次のとおりである。

講座	93年8月 ～94年7月	94年8月 ～95年7月	95年8月 ～96年7月	96年8月 ～97年7月
CAI応用講座	1509	BCC講座と合同	BCC講座と合同	BCC講座と合同
BCC講座	1206	1486	1520	1560
CAI企画講座	404	479	640	680
インターネット活用講座	0	0	0	120
インターネット活用講座	0	0	40	320
特別の先生の講座	1638	959	1270	840
一般活用講座	8379	9700	13864	13864
合計	13156	12624	17334	17384

1997年6月現在のコンピュータールームとインターネット接続状況。

学校の種類	利用可能コンピューター室の割合	TAネットへのアクセス率
小学校	20	3
中学校	100	12
高等学校	100	30
専門学校	100	30
大学	100	100

将来計画

1.10年計画

2007年までの10年計画の第1次計画が1997年6月から始まっている(2001年6月まで)。第1次計画では

- (1) TANnetの拡大
- (2) コンピューター施設的环境(運営とメンテナンス)整備
- (3) 遠距離学習の環境整備(全ての教室のコンピューターのインターネット接続、遠距離学習教育

スペシャリストの養成、NIIスペシャリストの養成等を含む)

2.10年計画から期待される成果

- (1) 情報教育の全市民への拡大
- (2) インターネットテクノロジーによる学習環境の地域差の解消
- (3) 従来型教室授業の改善
- (4) インターネットリソース利用による生涯学習の拡大と充実

10年計画をとおして学校だけでなく社会全体に21世紀のインフォメーションエイジを迎える態勢を準備し、頭脳アイランド、ハイテクアイランドとして生き残っていこうという台湾の熱気のようなものが感じられた。

Jennifer Jones,

Merici College, Australian Capital Territory  
オーストラリア

オーストラリアの高校(collegeは7年生から12年生まで)ではコンピューターはやりたい生徒が選択として学べばよかった時代は過ぎ去っている。社会のあらゆる分野でコンピューターのスキルが要求されているからである。現在学校現場ではカリキュラムの中にコンピューター教育をどう位置付けていくか、コンピュータースキルを習得させるベストな方法はなにかが検討され、パイオニア的な授業が試みられている。

- (1) コンピュータールームでコンピューター科目として学ばせる
- (2) コンピューターを他の科目学習のなかに取り入れて学ばせる。

今のところこの二つのモデルがある。英語を科目として教えるか、インストラクションランゲージとして英語以外の科目にも英語を使っていくかという議論に似通っている。

コンピュータールームでコンピューター専門の教師から習う従来型の授業の問題点が指摘された。

- (1) コンピューター授業以外では英語のワープロとしての利用と数学の計算くらいで他の科目には利用されない
- (2) 10台から25台が設置されているコンピュータールームは上記授業の利用だけで満杯状態となる
- (3) ハードもソフトもすぐに時代遅れになる

オーストラリアの学校はコンピューターを所有することにこだわる。リースはお金の無駄遣いのように感じて抵抗があるようだ。しかし私立の学校のなかにはコンピューター会社とのリース契約に切り替えるところが増えていて、これが全体に広がっていく傾向にある。設備面の問題は他にも多々ある。しかしなんといいとも一番の問題は生徒がせっかく身につけたスキルをコンピューター授業以外で応用しようとしないうことである。この問題を解決する方法として取り入れられたのがLAPTOP方式である。生徒ひとりひとりが自分のノート型パソコンを持ち、文字どおりノート代わりにあらゆる授業で使っていくというものである。この方式はまず私立の学校で採用された。しかしこの方式も手もあげてというわけではなく、生徒がコンピュータに頼り過ぎにならないとか、全教師のコンピューター活用能力を高めるためのなんらかの研修の必要もあり、またこの方式が徹底されると教師の役割そのものが変わらざるをえなくなるなど心配する声はあった。また1台A\$350,000はするLAPTOPを全ての親が買ってやれるわけではない。買えない生徒が出てきた場合教育の機会均等をどう実現させるかという問題も残る。

いろいろ問題はあるものの Merici College では社会のニーズに応えるために1994年からLAPTOP方式を取り入れている。Mericiでは7年生、8年生の間にコンピューターの基本操作の習得とタイピングプログラムでキースピードをあげる訓練を積んで後にLAPTOPクラスに入るといった順序になっている。教師中心の従来型授業から切り変わってから教室に活気が出てきて仲間どうしで教えあう場面もぐっと増えたという。Mericiの

コミュニティでも卒業生のコンピュータースキルと応用能力が評価され始めている。LAPTOPは一括払い購入のできない生徒には3年払いのリース(負担はぐっと軽くなる)ができるようになって全員が手に入れることができた。

なにもかもいいことづくめのLAPTOP方式のようだが、クラスサイズが小さい(8人から15人)オーストラリアならではのことである。韓国の延世大学でLAPTOP方式が試みられたことがあったが、全員のコンセンートをどうするかがまず大問題だったこと、また始めてみたらノイズとヒートでどうにもならなかったという笑えない話も披露された。ノート代わりにLAPTOPを使うことについては英語をダイレクトに打ち込めばいいのと、ローマ字入力してから漢字、かな、あるいはハングルに変換しなければならないのでは心理的負担が相当にちがうという奈良先生の感想を付け加えておきたい。

床に座ってテーブルに所狭しと並べられた韓国料理をいただくレセプションは和気あいあい大変楽しいものだった。出されたスープを賞味したかったが、一人一碗にしては全体の数が足りないし、盛り分けていただくにしては量が少ないし、めいめいに盛る碗も見当たらない。とまどっていたら誰かがスプーンをつっ込んで飲み始めてしまったのであきらめた。あとで私もスプーンをつっ込んで一緒に飲めばよかったのだと教えられた。ひとつテーブルを囲んで食事を共にするということはそこまで気を許し合うということ、なんだかとても韓国人らしくて、究極の親しさの表現という感じがした。

#### 推薦図書

『探求。』 柄谷 行人著 講談社学術文庫

教える-教えられる関係について有意義な考察がありますので、ご紹介致します。特に、第1章と第8章は面白いと思います。

## 中国語を巡るインタビュー

## --- 大木先生と大西先生訪問記 -----

CIEC事務局の二名は夏の気配の残る9月12日、東京大学本郷キャンパスに大木康先生と大西克也先生をお訪ねして、お話を伺ってまいりました。

会誌Vol.3の特集「外国語教育を考える」の企画のなかで、日本の大学における中国語の教育事情について執筆して下さる方を探そうとして、まずは糸口を見つけたいと大木先生の研究室に押しかけました。場所は法文2号館3階、建物は古くて荘重、その中の一室に若くて颯爽としたお二人が待っていてくださいました。(これはどこから見てもお世辞抜きです。)

こちらの厚かましい訪問申し込みに「ここ本郷は語学教育ではないので、お役に立つ話でなくともよければ、、、」と云ってくださった大木先生は同僚の大西先生を呼んでくださっていたので、CIECの説明もそこそこに先生方のご専門から伺い始めました。

大木先生は16～17世紀、明代末期の文学がご専門、大西先生は紀元前10世紀頃からの中国語史がご専門とのこと、甲骨文字から帛書竹簡までを対象に戦国、秦、漢の頃まで、論語、史記の世界も含まれる様子です。

東大では駒場の2年間で中国語を選択で履修し、本郷では語学・文学を含めて専門に進んだ人に対応するので、「中国語教育」としては駒場が当てはまるようです。最近駒場では中国語を選択する学生が増えていて、香港に関する報道の影響か、いきなり広東語を学びたいという学生が出てきたり、三国志の講座を設けたところワッと受講生が集まったり。でも、中国語学・文学を専門にする学生の数は一定で、増えも減りもしないようですとのこと、この言葉に安心しました。

そして人脈を手繰ってお話いただくなかから、中国語教育の核においてになる先生方々のお名前を伺って聞き歩きが実現しました。ありがとうございました。(会誌Vol.3、P62のコラム「中国語をめぐる聞き歩き」を御覧ください。)

6号の会員コラムでは、生協職員の方に原稿をお願い致しました。到着順に掲載致します。生協職員にとっても存在意義のあるCIECであるための第一歩としての試みです。

## 広がる教材(学習)用パソコンの 取り組みから

佐藤 伸会員

茨城大学生協同組合 専務理事  
(大学生協東京事業連合理事)

思い起こせば、最初のPCカンファレンスの時に分科会で報告したときからの関わりになります。当時は日立購買書籍店長の立場で、茨大工学部システム工学科の学科指定のパソコン共同購入の取り組みの報告をさせていただきました。東京地区でも教材指定パソコンが広がり始める最初の頃でした。教材パソコンもここ数年の間に大きく広がり、東京事業連合における教材(学習)用パソコンプロジェクト委員会も5期を数え、各大学での取り組み事例を集約した事例集を発行して、生協が教材(学習)用としてパソコンを提案する取り組みを前進させてきました。最近では販売だけでなくサポート活動にも重点が移り、学生組合員にいかにかパソコンを使ってもらうかにも関心が広がってきました。多くの大学で教員のみなさんと生協職員が一緒になって、大学だけではできないサポート活動に取り組む事例も出てきました。PCカンファレンスやCIECを通じての活動が大きく貢献していることは言うまでもないことだと思います。大学生協は事業活動を主体とする組織ではありますが、運営の主人公は学生・教職員組合員自身である組織です。大学生協オリジナルモデルのパソコンも提案され、メーカーさんとの協力も広がってきました。今後は、こうしたなかで販売だけでなくサポート活動に取り組み、こうした取り組みの結果を生産者であるメーカーにフィードバックすることが学生にいかにかパソコンを活用してもらおうかの重要なポイントになると考えています。

## 来年度新学期生協推薦パソコン について考えていること

井上 善信会員  
山形大学生協 情報機器担当

私は山形大学生協で情報機器を担当しています。山形大学は平成9年度より全学部で教養教育の授業の中で情報処理教育をスタートさせました。それに対応して生協でも新入生に対してパソコンの共同購入を提案して多くの新入生に利用していただきました。いま、来年度の準備に入っているわけですが、今年度の総括やアンケートに基づいていくつか改善点を考えています。一つは講習会の件です。新入生のインターネットをしたい希望は強いのですが、昨年は十分な講習ができませんでした。来年度は東北地方でも生協のインターネットプロバイダの事業が始まりますので、講習会を受けたらそのまま持ち帰ったパソコンを自宅のモジュージャックにつなぐだけで、インターネットが始められるような内容にしたいと思っています。それからセットアップ講習会のときにタッチタイピングの講習を入れたいと思っています。二つめはパソコンの保証期間の問題です。なんとか長期保証ができないかと交渉中です。また、これは頭の中で考えているだけですが推薦パソコンの下取りやりサイクル等の問題も考えていかなければいけないと思っています。無論、単協だけでどうにかできる問題ではないとは思いますが、三つめはユーザーサポートの問題です。インターネットを利用したサポートができないか検討しています。全体としてどうしたら新入生によりパソコンを利用してもらえるか考えています。

## 教材パソコン・インターネット あれこれ

増田 勲会員  
龍谷大学生協同組合 R - Uni

龍谷大学深草キャンパスでは97年4月に初めて経済学部指定パソコンに取り組み約800台の利用を頂きました。初めての取組みであり試行錯誤の中で戸惑う事も多かったですが基本姿勢として特に重視したのは以下の点です。

1. 龍谷大学としての初めての画期的な取組みでありぜひ成功させ継続するものになることを目指す。
2. 利用組合員を基本に据えた取組みにすべく、利用者が購入してよかったと思えるように単年度採算よりもサポート面を充実させる。

このような姿勢とそれに基づく提案が評価され、指定パソコンの取扱いだけでなく、龍谷大学インターネットの指定業者として、生協が指名されました。

そして、97年12月から大学が生協インターネットと契約し全学生に対しアカウントの無料配布が開始されました（龍谷大学インターネット）。

日々インターネットの接続相談等に明け暮れていますが、今後の課題として、

- \* PCサポートコーナーの認知度UP。ならば、安心して気軽に立ち寄れる雰囲気作り。
  - \* 講習会の継続的な開催による龍谷大学インターネットの利用者増。
  - \* 指定パソコン購入者をはじめパソコン購入者への授業時使用以外での使い方の提案。
  - \* PCの使用やインターネットを利用することの意味を考え合う。
- などがあります。

今後、先生方、大学関係部署職員、利用学生（組合員）と一緒に考え合い、学びあいながらいろいろな事を築きあげていきたいと思っています。そして、CIECの皆様の貴重な経験に学びながら

『組合員の店・組合員の生協』となる事を目指して  
頑張りたいと思います。  
今後も宜しくお願いいたします。

### CIECの価値を 大学生協の価値にも

蓮見 澄会員  
全国大学生協連・広報チーム

厳しい経営が続く中で、大学生協がこの状況を  
打開できる方向として、一つにはいわゆる「事業  
への組合員の参加」をどう組織の基本にすえてい  
くかということと、もう一方で大学生協の事業そ  
のものが、組合員の生活と広く社会に貢献し、第  
三者からもそのことが認められることにあると思  
う。

そういった視点から見たときに HELP計画・PC  
カフェ・CIECと言った一連の活動は、この両面  
の要素を含む重要な活動であることは間違いな  
い。

しかし、だからといって大学生協の事業に関わ  
る部署・店舗・生協職員がふるって CIECの活動  
に参加しているかといえ、そうっていないの  
も現状のようだ。

これは、生協（職員）の意識が参加や貢献に鈍  
感だからというよりも、日常、会員生協総体ある  
いは店舗や生協職員が、まだまだ供給・損益をに  
らみながら短期的な視点での運営をしており、か  
つ「いつか実がなり、潤してくれる」といったも  
のに力をそそぐ余裕が全般的に無くなってきてい  
ることによるものだと思う。

そういうなかにあって、理想と現実、理念と事  
業の平行線をそのまま続けるのではなく、理想を  
掲げる側はより現実に合ったすすめ方を模索し、  
現実に縛られている側は、今こそその余力を理想  
に近づける努力に注入することが必要だ。

私個人としては、仕事から、CIECの持っている  
価値を、仕事に忙殺されている生協職員になるべ  
く分かりやすく伝え、いつの日か、その価値が大  
学生協への価値にもなる一助になればと望んでい  
る。

### メーリングリスト ciecnet から

各委員会のホームページ担当者決まる。

編集委員会は中村 彰会員  
国際活動委員会は筒井 洋一会員  
その他の委員会は事務局が当分作業を受け持ち  
ます。

ネットワーク利用委員会に新メンバー加わる。

佐々木 英人会員（鳥取大学 工学部）  
前島 昭弘会員（晃華学園中学・高等学校）  
綾 皓二郎会員（石巻専修大学 基礎理工学部）  
星野 勉会員（京都大学 工学研究科）

The Los Angeles Times' web site  
からリンクの要請、

<http://www.ciec.or.jp/link/others.html>からもLAT Webへ  
リンク

ホームページ作製ガイドライン成る。

(1) <http://www.ciec.or.jp/> の中の委員会の部分は基本  
的に委員会の裁量で制作頂きます。ただし、ネットワ  
ーク利用委員会が全体の調整をするのはご許可をお願い  
いたします。

(2) 読者からみてCIECのページは一体のページ集  
に見えるようにデザインに配慮してください。特に  
[//www.ciec.or.jp/images/](http://www.ciec.or.jp/images/)

にあるグラフィックスをできるだけ使って下さい。

(3) ディレクトリーごとに index.html という同名のフ  
ァイルが多数できるので、ディレクトリー違いの ftp の  
上書きミスにくれぐれも注意して下さい。

(4) グラフィック・ファイルなどのディレクトリーを  
決めるときは、リンク元のテキスト・ファイルを1、2  
年して消去するときの事を考え、リンク関係が分かりや  
すいように工夫して下さい。遠い将来リンク先の分から  
ないグラフィック・ファイルが溜まるのを最小限にする  
ようにご配慮ください。

(5) できるだけ入口のページ <http://www.ciec.or.jp/> に一発で戻れるボタンを付けて下さい。

(6) 英語版もぜひ制作下さい。それには、日本語版、英語版の内容の対応するページを自由に行き来できるボタンを付ける様にしてください。

IIJ に設置したホームページは 10 月 31 日 (金) に閉鎖。CIEC のサーバからのみの供給に。

それに伴って、メーリングリスト directors (理事会用) execucomm (運営委員会用) editcomm (編集委員会用) も CIEC サーバ上に移行させました。(11月18日)

### 単年度事業用メーリングリスト

butsure@ciec.or.jp が立ち上げる (11月11日)

『物理系テキストを CIEC 会員の collaboration で作ろうという提案』(呼び掛け人代表は松浦 興一会員) について PCC'97 でイブニングトークが行われ、そこで、まずはメーリングリストでの意見交換から始めようということになり、CIEC のサーバにメーリングリスト butsure が作成され、メーリングリストのメンテナンス方法を伝達する必要が生じたことや、CIECware/text の概念の具体化プロジェクトとして、どのように受け止め推進していくかについて議論が行われました。

### PCC ホームページ・コンテストについての議論を!

97 PCカンファレンスのホームページ・コンテストについて議論を呼び掛けましたが、何の意見もないので、事務局からホームページ・コンテスト開催の経過説明を行った後、コンテスト担当会員より同志社実行委員会の労をねぎらうとともに検討案が提出されました。98 PCカンファレンスに向けて、実りの多い議論が望まれます。

検討案:

(1) CIEC 全体の事業として、コンテストをこれからはばらく毎年やることについては、慎重に考えたほうがよい。少なくとも、会員の反応が芳しく無い状態で、これだけの事業にゴーサインを出すことは出来ない。

(2) もし、やるとしたら、やる意義は十分にある。負担が多すぎるというのが最大の問題。対象を絞り、学生院生対象、応募してもらう分野は学生生活に直結したも

の、とするのが最善と思われる。

(3) ぜひやりたいという意見が強い場合には、今年のように、開催校の希望があった場合の自主企画、ただし CIEC としてももう少し援助をする、というのが、纏めるための案として最善と思う。(卜部 東介会員)

### 『メーリングリスト管理者事始め』の作成

『メーリングリスト管理者事始め』が板倉 隆夫会員、熊澤 典良会員により作成されました。これには、UNIX コマンドの説明・新メーリングリストの開設作業の説明・メーリングリストの設定の仕方の説明がありません。『FreeBSD/Linuxで始めるメーリングリスト 管理者編』梅垣まさひろ著、情報管理刊、2400円も参考にして下さい。(鈴木 治郎会員より紹介)

メールの遅れに関して 時間を stratum-1 な time server に合わせるように設定して解決。

### メーリングリスト confcomm (カンファレンス委員会用) 新設 (11月25日)

このメーリングリストは、カンファレンス委員会用で、研究会のテーマの選定や98 PCカンファレンスの企画について議論を行っています。

### 学生院生のためのメーリングリスト

students@ciec.or.jp 新設 (1月19日)

このメーリングリストは、メーリングリストからニュースグループ(ローカル)に自動投稿し、ニュースの記事のプールを見せる方法ですから、ニュースグループに直接投稿できません。投稿は「実はMLから(MLがそのNGのmoderator)」という仕掛けになっています。

このメーリングリストは、CIECが学生・院生の意見交換の場として設けた参加自由型のもので、教育の受け手の立場にある学生院生が、教職員と対等に学内のコンピュータ環境や教育の改善・向上にむけて議論をすすめることを目的とします。関心のある教職員の方々もどうぞご参加ください。CIECのホームページでも見られるようにします。このことで多くの学生の目にふれて参加者を増やすことが可能になります。

参加方法については、Newsletter 6号の表紙をご覧ください。

## メーリングリスト ciec から

### 高校普通科の情報教育

9/19(金)の朝日新聞朝刊12版4面(宮城県配達版)の論壇で、岩尾 達男氏(コンピュータコンサルタント=投稿)が”高校普通科の情報教育に望む”と題して、普通科の情報科目は「コンピュータの取り扱い」でなく、「情報化の基礎理念」-アルゴリズムの基礎教育、情報哲学-を中心として欲しいと論じているが、コンピュータ/ネットワークの巨大な能力、潜在的な可能性に目覚めさせること、コンピュータ/ネットワークをとにかく自由に使用させて慣れ親しませること、実践面ではタッチタイピングの習得、日本語ワープロなどを使って日本語の表現力・プレゼンテーションの方法を身に付けさせる方が大事との問題提起があり、小学校から大学までそれぞれの現状や教材のあり方、ネットワークと人との付き合いについての考え方との相関などと焦点を変えながら議論が続きました。

参加者：綾 皓二郎会員、古川 暢朗会員、鈴木 治郎会員、植野 義明会員、時田 節会員、熊澤 典良会員、板倉 隆夫会員、宮本 裕会員

### メディア関係用語の英語での説明

サイバースペースなどのメディア関係用語を英語で説明してある文献やウェブ・ページの紹介願いに対して、<http://www.ritsumeai.ac.jp/kic/so/seminar/ML/index-e.html>などの参照を奨める答えだけではなく、検索ソフトの評価やインターネットで簡単に人に頼み事をする風潮についての議論へと話題が広がりました。

参加者：森田 正彦会員、時田 節会員、鈴木 治郎会員、宮本 裕会員、熊澤 典良会員

### タッチタイピングの学び方

中学1年生の欧文キー位置の学び方についての質問を契機に、タッチタイピングを学ぶ有用性・必要性を巡る討論やタッチタイピング教授の実態調査についての提案がありました。タッチタイピングを学ぶソフトとして、CIEC Typing Clubの他にMario Teaches Typingを奨める声がありました。

参加者：時田 節会員、中村 彰会員、宮本 裕会員、

板倉 隆夫会員、中津山 幹男会員、植野 義明会員、綾 皓二郎会員

### 山口大工学部のパソコン必携

必携パソコンの選定の仕方や必携パソコンを使用している授業の進め方についての山口大新聞会員のレポートを巡って、学生新聞ライブラリの提案、ウェブ・ページ上のデータベース作りのソフトの紹介等広がりも見せながら、パソコン必携の理由についての考察まで行き着きました。パソコン必携の理由は、パソコンリテラシー以外の授業でのパソコンの活用と、学生個人のパソコン利用であるとの意見に対して、必携の理由が思い当たらないとか、一律にメールするとか一律にパソコンの活用とかは問題で、活用の内容こそ問われるべきとの意見が出され、それに対して又、魅力的なパソコン活用の提案・メーリングリストの意義を述べる意見が出されたりしました。このテーマについては、途中で配信された東京学芸大訪問記についての意見とも合わせて、大変議論が盛り上がりました。

山口大新聞会会員はその後山口大で開催された「インターネットと社会を語るシンポジウム」の報告や山口大生が入学時に貰うログイン名活用推奨記事等沢山のレポートや『知の技術者宣言』 鷲田小弥太著を巡る情報を寄せて頂きました。

参加者：縄田 陽介会員、時田 節会員、杉山 直樹会員、板倉 隆夫会員、中村 彰会員、宮本 裕会員

### 北尾 謙治会員著『英語教育のための パソコンとインターネット』を巡って

北尾 謙治会員の著書をメーリングリストciecで紹介致しましたが、購入しようとしても、めぼしい書店でも見つからなかったことから、出版社・書店批判が繰り広げられました。北尾 謙治会員の著書については、<http://ilc2.doshisha.ac.jp/users/kkitao/japanese/library/book/internet.htm>をご覧ください。大学生協に対しては、書籍輸入の面、特に中間雑誌の取り扱いに努力を求める声があったことをつけ加えておきます。

参加者：時田 節会員、中村 彰会員、縄田 陽介会員、野澤 和典会員、植野 義明会員

### 会誌への提案

- I) 学生を書き手に起用してほしい。
- II) 学会などでは立派なパソコン活用事例を発表するのに、日々の授業では活用しないような書き手はいらな

い。

III) 20年後に有益な教育的資料になることを目指してほしい。

との会誌編集への希望に対して、会誌編集委員から特に。)については前向きに取り組みたいとの解答がありました。

参加者：時田 節会員、松浦 興一会員

## どっちが先?——数学教育の現状

数式を見てグラフを思い浮かべられる能力や空間認識能力(幾何学的直観力)の養成よりも、計算能力の訓練一辺倒の現状を嘆くやり取りが続きました。

参加者：植野 義明会員、鈴木 治郎会員、宮本 裕会員、時田 節会員

## ZeRO コードを必要とする理由

### ——ユニコードについて

ユニコードが収容する漢字コードでは不十分であることや中国朝鮮日本の漢字の無理矢理の画一化という問題を巡って、行政の問題であることの指摘、新共通コードを作成して漢字圏の文字コードを統一する抜本的解決策の提唱、その提唱の短所を指摘し、言語毎に文字コードを定め、そのエンコード方式を定めて、世界レベルで認定すれば、各自に必要な多言語環境は整うとの提案、その提案についての賛同と疑問の同時表出、ハードの進歩でオーバヘッドをどこまで許容できるか知りたいとの意見、<http://www.win.or.jp/horagai/moji/code4.html>を見ても、態度決定できないとの表明、資料保存問題は未だ不完全なマルチメディアで解決できないとの指摘、漢字とコード化の問題を論じてユニコードの代案の提示の困難性を適時性との関連で明らかにした意見などが続き、この問題が大変難しい問題であることを証明する結果になりました。

<http://www3.mediagalaxy.co.jp/bungeika/whatsnew.html>も参照して下さい。

参加者：渡辺 克司委員、吉江 修会員、中村 彰会員、卜部 東介会員、宮本 裕会員、植野 義明会員、杉山 直樹会員、一色 健司会員、榊原 進会員

## 会誌3号特集座談会のカタカナ表記問題

会誌3号の座談会記事は、カタカナ表記は概念を曖昧にしか伝えないので英語表記を用いるという方針に基づいて書かれていますが、これについて、カタカナの存在意義を述べ、何でも日本語に訳す弊害についての意見

や、この座談会の編集責任者のカタカナ表記と英語表記の基準が不明で、カタカナ表記を英語表記に変更しても問題解決にならないという指摘、だから文化に相応しい日本語表現を作る必要があるというこの責任者の反論、カタカナ使用可の基準は、「古くからの日本語に十分馴染んでいるもの」と「代名詞的な通用語で広く受け入れられて概念が定着している」の2点とすると、恣意的で分からないという意見、試みとしての英語表記は意義のあることだが、読みの流れが止まるから、初出のカタカナ表記のみに英語表記を付するのが良く、対応の日本語を探す努力も不可欠とする意見、カタカナ表記では座りが悪い、言葉の表す概念の把握が先決で、こなれた概念共有がカタカナ表記許容の基準ではないかという指摘、日本人には既成の用語に新たな概念を付加するのを嫌う傾向があるが、創作漢語の氾濫も問題との意見、会誌という媒体での英語表記の試みは不適切との指摘、これに対する3号編集委員会の状況説明、英語を曖昧なイメージの伝達に使用する風潮の指摘、訳語造語検討委員会設置の提案、外来語使用でより真実に迫る可能性の示唆、西洋科学受容の歴史と今後思いを馳せる意見と議論が広がりを見せ、その後、座談会の内容が眼目で英語表記の読み難さには言及されなかったケースの紹介と続き、最後に、会誌の用語の望ましい書き方を定め、カタカナ表記を考察するのに不可欠な視点の補充と不必要な視点の指摘という展開を見せました。

この問題につき、PCカンファレンスにて取り上げるようにとの提案が、座談会編集責任者からされています。「肉叔熊手」や「乾酪乳餅」の読み方の楽しい出題もあったことを付記します。

参加者：中村 彰会員、宮本 裕会員、湯浅 良雄会員、佐良木 昌会員、杉山 直樹会員、一色 健司会員、若林 靖永会員、植野 義明会員、綾 皓二郎会員

## 数学教育のシンポジウムを巡って

シンポジウム「これからの大学における数学教育」--後期専門教育と前期基礎教育の融合をめざして...の案内を契機として、数学とは何かについての興味深い討論がありました。シンポジウムでは、数学観には、受講する学生の数学観(公式を覚え数字を入れる)と、純粋数学研究者で数学科以外の人に数学を教える人の数学観と、純粋数学研究者でない数学のユーザである専門家の数学観の3つがあって、統一がとれていないのが問題だという発言があったそうです。それに対して、それらの数学観を戦わせる場があって良いという感想が寄せられました。中国の数学教育では科学研究と教育研究の幸福

# CIEC 活動報告

な結合が見られるとし、専門の異なる学生の心を数学の授業でつかむのにはどうすれば良いかを盛り込んだ『大学数学の指導要領作り』の提案がされました。  
参加者：植野義明会員、時田節会員、鈴木治郎会員、

## 理科離れとセンター試験を巡って

『教員養成学部・課程の理科離れを加速する「新入試方式」への画一化に警鐘を』と教員養成の現場での危機を知らせるメールが入り、それを巡ってやりとりがありました。そのメールによれば、教員養成部門の入学試験2次で、専修の教科科目を課すのではなく論文・小論文を課す(横国大教育学部方式)のでは、教育学部の文系化を進めることになり、理科教員に適性を持つ学生を激減させるとして、新潟大では、文部省と新潟大入試課事務官の押しつけに抗して、従来通り教科科目を課す2次試験を実施することになったそうです。それについては、大学入試レベルの理科の知識では、論文試験の問題作成が困難であることを知らしめる必要を説く意見、センター試験で物理離れが加速するメカニズム予測が寄せられました。朝日新聞社の「ASAHI NEWS SHOP」シリーズ『理科離れの真相』安齋育郎・滝川洋二・板倉聖宣・山崎孝 共著の概要を紹介してのやりとりの後、「大学の物理教育 通算6号 1996年7月」に掲載(実際の掲載記事は『「理科離れ」と理科教育者養成の課題』の題名に変更)の『「科学離れ」と科学教育者養成の課題』の記事の紹介がありました。その記事では、共通1次入試以後の特に教育学部小学校課程に理系の学生が来なくなった現象の分析、高校理科の選択科目の多様化とセンター試験が助長する弊害の説明、小学校教育が中学校教育との連続性を絶たれ地道な理科教育が行われなくなっていく過程が描写されています。この記事の作成者からは、CIECで「マークシート方式のセンター試験」の問題を考えよう、パソコン使用の試験の開発で協力しあおうとの提案もされました。

参加者：小林 昭三会員、時田 節会員、鈴木 治郎会員、縄田 陽介会員、植野 義明会員、古川 昭夫会員、藤村 ゆきとし氏

### メーリングリストにご参加を!

メーリングリストciec とciecnetに参加するには、  
ciec-request@ml.ciec.or.jp  
ciecnet-request@ml.ciec.or.jp  
宛てに、メール本文の欄の先頭に、  
subscribe と入れて、メールして下さい。

## CIEC 活動日誌

- 1997年  
10月16.17日 会誌3号特集のため立教大池田先生訪問/お茶大相原先生訪問  
10月23日 『東京学芸大における情報教育の現状と今後』の集い出席  
10月25..26日 外国語コミュニケーション交流会アドバイザー派遣、野澤 和典会員  
10月27日 97PCCメーカーブース出展企業にお礼状など送付  
31社送付 9社からアンケート  
10月31日 拡大カンファレンス委員会(97PCCの反省と今後のCIECとしての取り組み方、カンファレンス委員会の拡充について。)  
11月1日 97年度第2回運営委員会(メーリングリスト整備/名簿整備/97PCCシンポジウム書籍化の進め方/会員拡大問題)  
11月1日 会誌編集委員会(3号進捗状況・内容確認、在庫処分問題、4号の企画について)  
11月6日 国際委員会メーリングリストintercomm立ち上げ。以後、海外派遣について討論中  
11月7日 大学生協九州地区機器担当者会議後の教材パソコンについての聞き取り  
11月8.9日 97PCカンファレンス九州  
講師派遣越桐氏、事務局参加。  
11月11日 単年度事業『物理のテキストを作ろう』用メーリングリストbutsuri立ち上げ  
11月12日 会誌3号青やき校正  
11月15日 ソフトウエアの広場の打ち合わせ  
98年3月1日立ち上げ予定  
11月17日~25日 CIEC会費未納者調査・請求準備  
11月18日~19日 未加入会員生協宛加入案内発送。178通  
11月18日 4メーリングリスト、ijよりCIECオリジナルに移行する。  
directors(理事会用)、execucomm(運営委員会用)、editcomm(編集委員会用)、softcom(ソフト委員会用)。  
11月22日 98PCカンファレンス開催について、慶応大SFC正式依頼準備のため、オープンキャンパス会場設備状況見学。大岩先生打ち合わせ。  
11月25日 メーリングリストconfcomm新設。  
カンファレンス委員会の討論開始。  
11月26日 会誌3号発行・会員に発送。会費未納者に請求書同封。  
11月27日 98PCカンファレンス開催について、SFC施設借用の要請を大岩先生、遠山専務とSFC事務長に申し入れ。  
11月28日 会誌3号発行のご案内、  
大学生協専務理事、書籍店長あてに発送。  
12月1日 CIEC実務事務局会議 現在の課題確認。  
12月10日 奈良会長、アップルコンピュータ社長表敬訪問  
CIECパートタイマー人件費に関する覚え書き作成  
12月11日 98PCカンファレンス開催について 慶応湘南藤沢事務、事務長、総務担当課長訪問。追加資料の提出を求められる。  
12月20日 全国大学生協連合会の第41回通常総会にブース出展  
・学生、生協職員対象にコンピュータに関するアンケートをとる。  
・教育におけるコンピュータ利用に関するセッションを開き、学生(数名)、院生(数名)、教員(1名)の出席を得る。  
98PCカンファレンスの慶応SFCでの開催依頼を期限切れで取り下げる。  
12月21日 学生院生のメーリングリストを新設し、意見交換をすることに決定  
12月22日 年会費2年分滞納者に納入依頼の電話、FAX入れ  
(事務局)

12月26日 国際活動委員会開催（海外調査に関して討議）  
97PCカンファレンス記録ビデオ編集完成（小野理事）

1998年

1月19日 学生院生のメーリングリスト（students@ciec.or.jp）を  
立ちあげ。CIEC会員、97PCカンファレンス参加者、  
大学生協学生委員に参加呼びかけを開始

## 97年度第1回CIEC運営委員会議事録

日時 10月4日（土）13時00分～17時00分  
場所 大学生協杉並会館 2階 ミーティングルーム2  
出席 松田、矢部、湯浅、中村、大野、筒井、板倉  
事務局 / 仲田、朝田、内山、羽田  
欠席 奈良、匠、赤間、松本、一色、

### 議題

#### (1) 97pcカンファレンスと今後の進め方

CIECとしてのまとめ討議を実行委員、司会者会議の参加できるメンバ  
ーと運営委員会と合同で実施する。10月31日 夕刻

#### (2) 総会後の97年方針の具体化

会誌編集委員会については、3号の準備状況が中村運営委員から報告  
され、確認した。いくつかの意見があり、一度検討会を何らかの形で実  
施したらどうかということになった。

ネットワーク委員会 矢部運営委員の討議のまとめを確認した。ijj  
のホームページは出来れば10月いっぱいまでとする方向で事務手続きを  
する。

国際活動委員会 松田運営委員から、方針の2と3を軸に活動する、  
サーバ上にリンク集の案内をつくる、メーリングリストをつくる、など  
提案され確認した。また、今年も海外派遣を2名の範囲で検討する。会  
長の韓国行きはCIEC会長としてなので、CIECの財産として報告する。  
など確認した。

#### ソフトウェア委員会

- ・委員長を湯浅運営委員から一色運営委員に交代する。時期は未定。
- ・湯浅委員は、ソフト交流の広場を担当する。
- ・ソフト調査は報告を会誌の次号に掲載する。
- ・CIECウエアCIECテキストの呼びかけを次回運営委員会で検討で  
きるように準備する。

#### これまでの予算執行状況と今後

- ・収入が200万円減収の見込み。その分は会議費で100万円、予備費  
で100万円おとす。
- ・総会予算表で会議費10万円、合計と細目が違って、合計480  
万円になっているが、実際は490万円必要なので理事会で確認する。
- ・事務局用機材購入に50万円備品費から支出。

#### (3) 単年度事業費の取扱いについて

- 企画書と報告者を提出する。 A4で0.5～1ページで。
- ・タッチタイピングのウィンドウズ版開発の機材購入に50万円
- ・物理テキスト作成用会議費に20万円程度
- ・ネチケットの作成に関する交通費
- ・シンボの書籍出版の買い取り分（団体会員に1部ずつ程度）。

#### (4) 団体会員、個人会員の加入促進について

- ・次回運営委員会で議論し、必要なら担当までできる。

#### (5) その他

##### 事務局からの質問提案事項について

- ・主要には(4)の項目に持ち込んで討議する。
- ・ニュースレターは担当は事務局で、運営委員会で企画案を確認し、  
メーリングリストをつかたりしてすすめる。

##### 役員選挙規約について

大野運営委員担当ですめる。

## 97年度第2回CIEC運営委員会議事録

日時 11月1日（土）9時45分～14時30分  
場所 大学生協杉並会館 2階 ミーティングルーム3  
出席 奈良、松田、矢部、湯浅、中村、大野、赤間、板倉  
事務局 / 小野、仲田、朝田、内山、  
欠席 松本、筒井、一色、匠、  
議長 矢部運営委員  
議題

### 1. いろいろなこと

(1) 情報処理学会から、CIEC会員名簿の公開要請があった件について  
(CIECにおける名簿の管理・整備について)

#### 確認事項

- ・年に一度（総会の案内時に）、個人データの本人確認、訂正、変更を  
各会員にお願いする。
- ・会員の氏名と電子メールアドレスは、公表する用意をする。ただし、  
前もって許可を得ている会員に限る。WWWホームページ上での公開  
はしない。
- ・企業からの宣伝の受け口としてのMLと、他の学術団体からのお知ら  
せ用のMLを開設し、CIEC会員の自由参加とする。（投稿メールを  
WWWへ自動掲載すると、確実に読みたい会員だけがMLに登録するこ  
とになる。）
- ・呼び掛け人は設立時に全員CIECの会員へ移項すること（退会される  
とき申し出ていただく）を確認し、広報してきたが、本人にその認識の  
ない場合もあり、その後の個人データの登録（一般の新規会員と異な  
り）の内容の書き換えに及びきれていない、などの問題がある。この問  
題を整理するために、96年会費未納の会員宛での文書案を事務局で作  
成し、ciec-pre MLに流して検討することとする。

#### (2) iij委託の4つのメーリングリストについて。

・CIECのサーバでMLの設定、動作確認が済みしだい、CIECのサーバ  
に移行する。

#### (3) 議決書とニュースレター次号

- ・議決書は短縮版を会誌と一緒に配布する  
(議決書の予算数値としては、修正値を用いるためciec-riji MLに流し  
て了解を得る。)
- ・ニュースレター次号は1月発行で準備する。  
(電子的な配布方法も今後検討していく)

#### (4) 事務局機材購入について

- ・プリンタは、LaserWriter 16/600 PS-J程度のものであるとする。  
事務局で使用するソフトウェアを、CIEC事務局として購入し整える。
- ・機器は提案のパワーマック7300で確認（メモリーは補強する）。

#### (5) 役員選挙規約について検討し、案を確認した。

### 2. 各委員会活動について

#### (1) カンファレンス委員会

昨日拡大カンファレンス委員会を実施して、委員を確認し、委員会を  
拡充して今後98年カンファレンスの準備と年3回程度の研究会の開催  
を進めていくことを確認した。当日の欠席司会者のメンバーにも呼びか  
けていく。

(これまでの研究会のやり方について、お金をかけたわりには、全会  
員への共有の仕方が今一つではないか。ニュースレター、ネットワークの  
より有効な利用方法を工夫する必要がある。)

#### (2) 国際活動委員会

派遣対象をどこにおくかの議論を若干おこなった。遠隔教育の国際間  
実施もひとつのテーマであること、CIECとしてアジアをどう考えるか  
も検討する必要があることなどが出された。

(このほか意見として、・教育か研究か。学生を含めたものにするかど  
うか。 / ・教育のなかでの応用の可能性が一番大きい。 / ・アジアとの

関係は今後逆転していきそうな気配を感じた。)

国際活動委員会として検討すべきことは調査活動に出かける場所をきめること、会員があちこちにいった報告が集まる仕組みをつくることである。スケジュールは、3月春休みに実施するので、11月中に一度会議を開き、その後をメーリングリストにして、今年中に派遣先を絞る。それから募集などの活動を行う。

### (3) ソフト委員会

引継が課題である。今月中を目途にすすめる。

「ソフトの広場」はまもなくたちあげる。

### 3、単年度事業費

#### (1) 物理テキストプロジェクト開設の申請書類を検討した。

打ち合わせ会議2回程度30万円相当？(交通費内訳を事務局で計算する。東京開催、関西開催、宿泊費、1泊。)

基本的にこの方向で可。CIECウエア/CIECテキストに位置づけて取り組んでほしい。

#### (2) シンポジウムの書籍化

東大出版会からの出版が流れたので、自費出版で700部程度を検討する。少しうれて、必要などころに配って、最終的に50万円以内の経費負担で済むよう、申請書を用意する。(A5版、200頁、700部で見積もりとる。愛媛の印刷屋、光陽 3社でとってみる)

#### (3) インターネット利用マニュアルの作成などある模様。

今年度の単年度事業費の申請は12月中旬に締め切りとする。

#### 4. PCカンファレンスについて

カンファレンス委員会の討議報告をうけた。98年カンファレンスを今年と同じ方式で実施するなら、実行委員会、事務局体制を考慮する必要があることが明らかになった。

CIECの企画であることをアピールする方法、受け付けでの加入の方法に工夫が必要である。

#### 5. CIECの現状と今後への加入促進

団体企業との関係 理事選出会員との連携づくり

会長と大野委員の担当で、もう一度進めてみる。

企業拡大について 東京、京都でリストアップをして、事業連合の協力を得て、担当を決め、依頼をすすめる。小口会員を増やす。取引先以外もリストアップしてみる。

大学生協(各大学)との関係

会員生協まわりをして、団体加入と生協職員の加入を呼びかける。

個人会員の加入推進

会誌発送のとき、会員に呼びかける資料がある、といって5部ずつくらいいれる。

「呼びかけ人だけのつもりだった」という人を確認する。発表はあとまわしにしてかためるのはこのとき。学会などのときは呼びかけてもらう。資料(会誌一号など)があることを宣伝する。春頃をめどに組織的にとりかかる準備をする。

## 国際活動委員会議事録

日時 12月26日16時～19時

場所 杉並大学生協会館、ミーティングルーム3

出席 松田、石川、綾、生田、野澤、松原、の各委員と

佐伯、湯浅、小野の各理事

事務局から 仲田、朝田、小笠原、内山

大学生協連 関係開発チームの本田氏がオブザーバー出席。

会員の海外派遣で何を調査すべきか、何が求められているかの議論が行われました。

その際の視点として、以下のようなテーマを中心に 議論が進められま

した。

1. 97年度PCCで取り上げられた「分かちもたれた知能」「学習者中心のデザイン」といったテーマを更に発展させられるような調査の可能性を探る。

2. 大学教育においても今後新しい動きが起こることが予想されている遠隔教育などを、旧来の一方通行型ではなく、「コラボラティブな学習環境」「バーチャルクラスルーム」といった観点で展開している事例の調査の可能性を探る。

3. アジア太平洋地域にも目を向けた調査を検討する。

議論は、松田委員長の司会で、海外の状況を交換しながら、フリートークの形で進み、以下のような論点が出されました。

1. 台湾、韓国などアジア地域におけるコンピュータ利用教育と遠隔教育の事例紹介。超エリート教育の中で、北米の大学と組んで遠隔授業による学位取得などのプログラムがあるが、学習システムとしては一方通行型であろう。

2. 文部省の推奨する日本における遠隔教育も、旧来タイプ的一方通行型のものになる危険があり、新しい共同学習型のあり方を探る必要がある。

3. 欧米型、特にピー氏の共同型はカナダのトロントでのCSILEで典型化しつつある。三宅氏はその組織委員をしているので、話を聞くのもいい。ロイ・ピー氏のは共同学習の場を細胞分裂的に広げていく作り方である。地域の地域性、文化性を尊重している。カナダのアルバータ州ではコラボレイティブが盛んである。

4. 大学教育におけるコンピュータ教育、コンピュータ利用教育の実状調査も必要である。現在も大学におけるコンピュータ教育、コンピュータ利用教育をいかにすすべきかで悩んでいるところは多い。リテラシー教育、専門教育を含め、そこにとりいれられる海外の実践例があれば、調査し、学んでくる必要がある。

コラボレイティブ方式はゼミでは使えるけど、大規模授業もあるのだから、それに活用できる事例がない。

5. 学生の側からの調査も必要である。

大学が実施した学生生活実態調査があるが、この中にコンピュータ教育に関する学生の意見が入っている。大学生協の学生委員会などと一緒に学生の意見をとりあげていく必要がある。海外調査で、大学での授業風景とか学生の生の声とかがほしい。

6. 調査地域としては、北米、アジア、オーストラリア・ニュージーランドの他、可能ならヨーロッパも対象にして検討したらどうか。

以上のような論議のあと、論議のまとめとして、以下のような点が確認されました。

1. コンピュータとネットワークを活用した新しい共同学習型教育の事例調査を今後も進めていく。その場合、リテラシー教育だけでなく、それぞれの専門教育の分野でどのような活用が考えられるか、何ができるかも重要である。

2. 直接海外に出かけて調査するだけでなく、CIEC会員が海外出張や留学などで得られている情報を共有するシステム作りを、メーリングリストや国際活動委員会のWebのページなどを活用して、検討する。

3. 教育をうける学生側の状況、学生がどう思っているのかを調査する必要がある。

4. 時間的な制約もあり、当面は現在得られている海外の状況の情報の集約に重点を置き、海外調査そのものは、ロイ・ピー氏からの情報も得た上で、1998年度において実現できるように準備を進めていく。